蛇沼子ども大黒舞
蛇沼地域で念願の再開

蛇沼子ども大黒舞

厳冬期の2月初旬、旧暦では春のはじまりとなる頃、蛇沼地区では小さな大黒天たちによる「蛇沼子ども大黒舞」が行われます。大黒舞とは、七福神の一人「大黒天」に扮した者が、家々を回って門戸に立ち、新年嘉祝の詞を唄い舞うものです。

蛇沼大黒舞は明治から大正時代に起源を持ち、かつては五戸や新郷まで門付けに回るなど、地区を代表する重要な伝統習俗として活動が盛んでした。しかし、大東亜戦争の影響によって長らく休止されたため、次第に伝承者が減り、一時は消滅の危機が迫ります。危機を救ったのは、地元有志と蛇沼小学校の教員たちです。蛇沼小学校開校100周年を記念して昭和52年、小学校を拠点とした活動が再開、同年7月4日には「蛇沼子ども大黒舞保存会」が設立されます。以降、地区の門付けは、子どもたちの手によって支えられることになりました。雪化粧の山里に、鮮やかな衣装に身を包んだ小さな大黒天が舞う様は例えようもなく、その風景を写真に収めようと次第に多くのカメラマンが訪れるようになりました。

平成15年、活動拠点であった蛇沼小学校が閉校するも、大黒舞は三戸小学校で継承されましたが、地区の少子化が進む一方で、成人した伝承者たちも就職や結婚で地元を離れるなど会員が不足したため、平成24年2月を境に地区で行われてきた大黒舞は休止となります。

再開

門付けが休止してからも、三戸小学校での伝承活動が続けられたことが実を結び、ことしは舞を習得した地区の子どもたちが7人に増えました。これを機に、地区の高校生1人を含んだ8人で構成された「蛇沼子ども会育成会」として再開を果たします。令和2年2月9日、地区の成人2人も加わった10人の大黒天が、白銀に染められた山里に福をもたらす舞が披露されました。

大黒舞を再開して思ふ

蛇沼子ども会育成会
会長 中村武浩さん（57）

地域の人たちからの反響も大きく、現在、他の地域に住んでいる蛇沼地区出身の人も見に来てくれました。蛇沼子ども大黒舞の再開を喜んでくれる人が多く、とても嬉しく思います。

蛇沼地区は広く、3つの班に分かれて地域全体を周るため、ことし「蛇沼子ども会育成会」に入った子どもたちは、ほとんどが小学校低学年や未就学であと10年は大黒舞を続けられる年齢です。今後も大黒舞を継承し、次の世代に繋げてくれることを強く願っています。

子どもたちの親も大黒舞を経験してきた人たちなので、現在、舞を教えている年配の指導者から指導の引継ぎもでき、地域間の交流に繋がるのではないかと考えています。